

〔研究ノート〕

共生概念の再検討

——生物多様性と文化多様性のアナロジカルな関係——

木 村 光 伸

名古屋学院大学国際文化学部

要 旨

多様性という言葉は、生物学的定義における原義である biodiversity とそこから成立する共生 symbiosis から大きくジャンプして、今や人間文化を表現する言葉となった。しかし、そのことが生物進化と文化進化を安易に混同させ、共生論を混乱させる元ともなっている。本稿では、自然科学の視点から論じられる生物多様性の世界で有用な多様性と共生の概念を基本に据えつつ、文化事象における多様性、文化の多元性と共生理解の方法を再検討してみたい。私の主たる調査フィールドでは政府と反政府集団の間で和平が進行し始めている。共生社会の実現の可能性を求める対話の中に、多文化共生の真実を求めたいと考える。

Reconsiderations for Symbiosis or Co-existence in Human Culture

Koshin KIMURA

Faculty of Intercultural Studies
Nagoya Gakuin University

※本稿のもととなる論考は2015年度名古屋学院大学研究奨励金（国際文化学部）の補助を得て行われた。名古屋学院大学総合研究所の全面的な支援とともにこの研究が支えられていることを記して、感謝に代えたい。

発行日 2016年12月31日

前提的な定義

共生とは、複数の主体が共時的に、また通時的に存在することによって成立する関係である。このような関係は、空間の共有を意味する、と同時に、各主体の歴史性ととも主体間の関係の通時性を前提とするものである。したがって、われわれが共生しているという関係性を問題にする際には、必然的に共生関係にあるもの間に横たわる時系列的な順序性、関連性、前後性などを顧慮する必要がある。

共生社会を考える前提として、私は生物学的な定義とともに文化相対論的立場あるいは多文化主義に基づく共生社会論の前提条件を提示し（木村，2013，2016），そこでは共生概念を次のように多元的に定義しようとした。

1980年代以降の生物学は、生物圏に存在する無限とも思える多種の存在を生物多様性という概念でひとまず説明してきた。ここでいう多様性とは、たくさんという意味だけではなく、それらの種がそれぞれに互いに何らかの関係をもって存在しているということを含意している。何らかの関係の中心は進化における分化と放散である。だからバイオダイバーシティ biodiversity なのだ。互いに関係しているということは、それぞれが相手に何らかの影響を与え、かつ相手から何らかの影響を受けているということである。この影響という構図の中には、それぞれの種にとってプラスのこともあれば、マイナスのこともあり得る。あらゆる関係の可能性を含みながら、相手を一方向的に追い詰めることなく、長い時間をとってみれば、相互に相手の存在に依存し、相手の存在を許容するという結果をもたらしているのである。とはいえ、それは生物種が互いに相手に友好的配慮をしているという意味ではなく、種はそれぞれに利己的でさえあるのだ。それが生物多様性の内実であり、生物的共生はそのような多様性の上に成り立っている。このような前提があって初めて、生物多様性条約（1992）で提示された3種の多様性が成立する。そこでは従来から多様性概念の要であった種間の多様性（たくさんの種が存在すること）とともに、種内の多様性（地域の変異すなわち遺伝的レベルでの多様性）と生態系の多様性（多数の種から構成される生物集団の多様性）を可視化できる実体概念として理解することが求められた。

そのような多種多様な生物種とそれらの生物個体を構成する素材としての無機物からなる有機的構造としての生物世界、すなわち生態系が調和的であるように見えるのは、ひとえに長大な時間の中で形成された関係であるからに違いない。つまり生物多様性における関係性は、時間に支えられた、言い換えれば進化の産物なのである。生物学的に提示される共生とは、このような複雑系なのであって、その中のいずれかの種が独自の法則性をもって他の種全体と対峙したり、優越したりするものではない。そうだとすれば、生物の1種として存在しているはずの人間としては、そこにこそ人間と生物的自然との関係を読み取っておかねばならないのではないか。自然環境を自制的に捉えるという意味での環境倫理観はそこに存在するのだろう。（木村，2016：一部改変）

ここで問題にした相互に相手を許容する関係、あるいは依存する関係は、じつはもう一つの生物特有の関係性を前提として成立するものである、そのような関係性について、20世紀の生物進化学を先導してきたエルンスト・マイアが、90歳を過ぎて執筆した21世紀の生物学者へ向けた遺書とでもいうべき著作『これが生物学だ』(Mayr, 1996)の中で、非常に重要なことを指摘している。それは生物が共存する状況(あるいはそのような状態が作り出される継時的推移)においては競争という関係が不可欠であるということだ。この一見矛盾した指摘の中にこそ、生物学的な意味における(つまり symbiosis としての)共生概念の真の意味を見出すことができるのである。このことはすでに木村(2016)が指摘している通りである。

共存の前提としての競争という考え方は、人間社会の共生論においてはなかなか受け入れられにくいものであろう。しかし、通俗的な表現を借りれば、「喧嘩するものほど仲が良い」ということであって、そのような関係性は、さまざまな人間関係の中では普遍的に存在するといってもよいだろう。もちろんこのような事態を、すべては思惑と駆け引きに依存する政治状況に重ねて理解しようとするのは無謀な試みであって、今回の論議の対象ではない。

生物的共生場面とは

生物的共生という言葉が醸し出す生物的世界の状況はいかにもハーモニックなものである。熱帯林を想像する人や、サンゴ礁の海に乱舞する色鮮やかな熱帯魚をイメージする人たちにとって、それらは予定調和とさえ言いたくなるようなバランスを前提する世界でさえある。とはいえ、現実の自然に一步踏み込んでみれば、それがいかに非自然的な幻想であるかということに気づかれる。そのような状況を指して、木村は次のように表現したことがある。

私は、1976年以降、長年にわたって生態学的研究の主たる調査地としてきたコロンビア・アマゾンのマカレナ熱帯雨林の中で、しばしば巨大な樹木の終焉に遭遇し、自然の歴史的な転換と継続の妙を体験してきた(Kimura et al., 1992)。真夜中に大音響とともに崩れ落ちる巨木とそれに引きずられるように連動して倒壊する周辺の樹木群は、悠久の時間が流れる緑の絨毯にとてつもなく巨大な、時には100mにも及ぶ穴を穿ち、風景は激変する。それはサルたちが空中に展開する通り道を分断し、夜の鳥からねぐらを奪い、昼間の鳥たちに休息の場を失わせる。何百万頭もの昆虫たちが、その瞬間から生活の場を新たにするために動き出す。植物たちは光と空間の争奪戦を始め、瞬く間に緑によってその場は埋められていく。すべての生物が生きるための戦略の全面的な変更を迫られるのである。熱帯雨林に生きるものたちにとって、それはまさに宇宙の崩壊なのだ。そしてその崩壊はかれらの新しい生活の始まりでもあり、飛躍のチャンスそのものでもある。

(木村, 2013: 一部改変)

生物の多様性の微妙なバランスは、このような生物それ自体の生命あるいは寿命と、環境の物

理的な変動との上に成り立っている。しかしわれわれ人間はそれを、神の配在として捉えることで、自然界の不可思議さを人間理解の超越的構造として「わかろう」としてきたのである。つまり、生物学として客観的な科学的態度を通して自然を解明しようとする人間行為そのものが、実際には自然を複雑であるがゆえに理解困難なものとして対象化していたとさえいえるのである。このような態度を大っぴらに表明する生物研究者はいそうにもないけれど、現実には複雑系としての自然界を解法の見当もなしに理解しようとする一種の不可知論を生み出し、観察事実の羅列を重ねることで、あたかも一つの世界を理解し得たかのように見せる一種のトリックに過ぎなかった。生態学と称する分野においても、自然をフィールドにする写真家にさえ追いつくことができないような自然観察研究は少なくない（いや私自身がそうなのかもしれない）し、科学的事実としての生態学的トピックスを指して「こんなに珍しい世界があることを私が最初に発見した」というような、あるいは「私しか見たことがない」というような優越的態度も横行する。研究態度がこのようになれば、それ自体が科学の進展を阻む要因にもなりかねず、あえて言えば、これは科学の敗北である。

さて、そのような非科学的対応はともかくとして、生物学的事実に立脚した研究が、人間研究へと拡大した時に、生物原則としての共生観（symbiosis）は、そのまま人間社会における共生と同義に論じられるものとして理解できるのだろうか。先の引用文に続いて私は次のように書いた。

考えてみれば人間を取り巻く自然という存在は、そのようにカタストロフィックな変化の繰り返しによって持続している。人類進化の揺り籠とされる東アフリカの乾燥した自然を形成してきた元凶の大地溝帯はそのような変化を500万年以上にわたって維持し、いまでも毎年少しずつ裂け目を拡大しているという。ただし、そのような環境変化に対する適応などという自覚をもって人類が進化を遂げた（環境を主体的にかぎ分けてきた）わけではないという意味において、人類は崩れ落ちた大木の周囲で右往左往するアリたちと同類なのである。また進化という長大な物語の中では「少しずつ」は「穏やかに」を含意しないということも肝に銘じておかねばなるまい。災害とはそのようにして生じる現象なのだ。

（木村，2013：一部改変）

上記のような歴史的な理解を背景に生物学的共生と、人間社会の共生事象との相同性あるいは相似関係を検討する。もちろん人間の問題が生物概念のそこに包含可能かどうかはひとまず置いておくしかあるまい。この問題は本稿の最後に考えよう。

いずれにしても、共生の問題の根底には生物社会がもつ多様性という概念を正確に理解する必要が横たわっており、それはまた、多様性を生じた歴史時間との関係、すなわち、進化の総体と関係する問題なのである。

生物多様性の理解

生物多様性を生態学のみならず進化生物学の最重要概念だと看破した E. O. ウィルソンは「人間の倫理的義務は、なによりもまず慎重さということである。私たちは生物多様性のどんな小さなかけらであってもひとつひとつをかけがえのないものとし、それを利用することを学び、それが人類に対してどんな意味を持つのかを理解しようと努めなければならない」(Wilson, 1992)と述べて、生物多様性が単に生物概念にとどまらず、人間社会の基本的な成立原理であるとともに、人間の倫理的義務として遵守すべき事柄であると主張した。生態学者のウィルソンはアリ科 (Formicidae) の社会構造の研究者であり、1970年代には名著『社会生物学』(1975)によって、進化という基本原理で動物行動、行動生理、精神活動 (心的活動)、個々の社会行動、さらには種固有の社会構造とその生態学的変異のすべてにわたる一元的な説明可能性を示し、一躍著名な生物学のリーダーとなった。その学説はアリのような社会性昆虫の制約を大きく超えて、動物一般の生態原理を通底する普遍性を備えたものとして生態学の世界に受け入れられたのである。

ウィルソン以降の生態学は、『侵略の生態学』(Elton, 川那部訳 1988: 原著は 1958) に代表されるエルトンの考え方にとって代わった。すなわち進化的時間として捉えられるほど長期に及ぶ種間の関係が、種相互の関係を相互依存、時には相互扶助をも連想させる生態構造として形成してきたとするエルトン流の生態理論とそれを日本的にアレンジした「関係性の総体」論 (川那部, 1992) は大きな転換を余儀なくされたのである。エルトンも川那部も観察事実を大切にすリアルリストであったけれど、事実を超える抽象を進化理論と結びつけることができなかつたのである。しかし、エルトンたちの考え方が生態学的説明として誤ったものであったということではない。かれらの理論がウィルソンのそれに乗れ越えられたかに見えるのは、ウィルソンの『社会生物学』に示された膨大な、そして多岐にわたる生態現象紹介を背景とした多様性に対して、当時の生態学の世界が圧倒されたからに他ならない。実際、多くの生態学者、進化生物学者が、ウィルソンの理論に対して、いわば本能的に懐疑的な態度をとったことが、何よりも現象に議論が集中して、理論そのものが機械論的かつ数学的整合性に誘導されすぎているという批判につながったのである。日本の多くの生態学者も批判する側に立つものが多かった。とくに当時を代表する著名な研究者、したがって教授クラスの学会指導者の中には、ウィルソンの理論に反感を覚えるものも少なくなく、そういう意味では新理論に対して積極的に迫ろうとする若手研究者との間に少なからぬ軋轢すら生じたのである。しかし、この対立は無益ではなかつた。

さて、そろそろ、生物多様性こそが生物社会の最大の原理であり、進化の結果を示す生きた化石の集積であるという立場の理論的主張に迫ろう。

南米コロンビア・マカレナ調査地における霊長類の長期にわたる調査結果をもとに、私はその地に生息する7種のサル分布の様式に関して、私なりの理解を示した (木村, 2005)。その主張の中心は、霊長類の重層的な集積による種の分布の密度化の根源には、それぞれの種が属する上位概念としての分類群に認められる「結果としてのすみわけ」が存在するということである。ひとつの種、たとえばアカホエザル *Alouatta seniculus* には同所的には生息できない他の多くの同

属種が存在する。私はマカレナで同種を観察（Kimura, 1992 など）しつつ、メキシコの *Alouatta pigra*, パナマの *Alouatta palliata*, ブラジル・パンタナールの *Alouatta fusca* などを比較調査してきた。それぞれの種は固有の分布域を持ち、同属の多くの他種とは完全に生息域を異にすることで、独立した種としての生態的地位を形成していた。ただし、グアテマラからメキシコ南部に生息する *Alouatta pigra* は、コロンビア北部からパナマ、コスタリカを經由してメキシコにいたる中米全域で生息分布が確認されている *Alouatta palliata* と、どのようなすみわけになっているのかがまだ十分には明らかになっていない。これを明確化するためにはさらに10年程度の広域調査が必要であろうが、私自身がフォローできる時間はすでになく、メキシコの若い霊長類研究者たちに期待する他はない。それはともかく、ホエザルの持つ多種間のすみわけの現象こそ、一つの属における分布様式の実体であるとともに、それらが自然条件の物理的側面や生息域の流域構造、あるいは森林の持つ生態学的特徴の多様性に依存的、かつ固有に形成されたものであることは間違いない。生態学者の多くは、一つの属の種に特異的に研究対象を絞り込むことが多い。それはひとつの種を理解するために必要な時間が個人の生涯の研究時間に匹敵するからで、たくさんを対象を研究しようとするれば、一つの対象にかける時間を節約あるいは省略するしかない。しかし、そのことは研究の精度を下げ、比較生態学的検証に耐えることのできる資料を収集することが覚束なくなるのである。そこで、たとえば、私は調査の大半をアカホエザル *Alouatta seniculus* の観察に費やし、必要な限りにおいて比較対象として他の近縁種の調査研究をしてきたのである（Kimura, 1992; Yumoto et al., 1999 など）。

マカレナのアカホエザルは、同属他種とのすみわけの結果として、そこに生息している、あるいは生息しているに過ぎない。それはある意味では偶然の所産ではあるが、歴史的事実であって、



図1 アカホエザル（マカレナ調査地）



図2 クロホエザル（グァテマラ・ティカル遺跡付近
（Original data by IUCN Primate Group）

そのような全体的な分布をなすことによって、他のホエザル属のサルとは異なった生活の仕方やそこから生じてきた形態的差異を生じたのである。生態学的差異や形態学的差異を背景に、私たちは種分化を論じてきたのだが、現在ではそれらのさらに背景としての物質的証拠が、そのような種分化の事実（あるいは結果としての証拠）を示してくれる。それが分子生物学的成果であり、端的にいえばそれぞれの種がもつ固有のDNAの分子構造と種内変異なのである。

さてそれでは、マカレナでアカホエザルと同所的に生息している他の6種のサルたちはそれぞれどのように種の分布を確定してきたのであろうか（木村，2005）。

マカレナにはアカホエザル以外に、ケナガクモザル、フンボルトウーリーモンキー、フサオマキザル、コモンリスザル、ダスキーティティ、それに夜行性のヨザルが生息している。それぞれの種はたくさんの同属の種を有しており、アマゾン熱帯雨林を中心にコロンビア東部乾燥地帯（ジャノス, llanos）およびアンデス山岳地域へと複雑な自然の物理的環境に成立してきた多様な植物環境に対応して種の多様化を果たしてきた。その中で、結果としてマカレナ調査地の近傍に生息域を持つ種が、私の観察対象となっているのである。種の分布をそのようなものとして捉えようと、ある時にはひとつの種の分布限界は、たとえば大河による遮断によるものであり、または急峻な高山や降雪、あるいは極端な乾燥地などによる分断などの結果として生起する。すなわち外部要因に規定された分断なのである。私たちはしばしば近似の種が相互に接触しあって分布域を確定していくという構図を描きがちであるが、実際の分布の確定とはそのようなものではなくて、むしろ分断の結果としての種形成を考えた方が実際に近いのではないだろうか。これは従来から隔離による種形成としてよく知られている現象であるが、隔離のような生物に対する変化を必要とさせる圧力がないか、あってもわずかである場合には、種の特徴の変化には相当に膨大な時間の経過が必要となるのである。偶然的作用による突然変異によって引き起こされた中立的な

分子遺伝が、特定の意味を持つか、もしくは無意味であっても形質変化に関係するか、というように場合に限って、隔離効果としての種形成は現実的なものとなる。

このように考えると4000万年もの長期にわたって大きな気候変動を経験してこなかったと考えられるアマゾン低地のようなところでは、地形の改変に伴う隔離と融合が新種形成の大きな要因となるに違いないのである。もしそうだとすれば、種形成は生物の（そうならねばならないという意味における）主体的変化であるというより、外部要因の偶発的变化によってたまたま得た生態的地位ecological nicheとの関係で生じた揺らぎのようなものとして理解しなければならない。

アカホエザルを含む7種のサルたちが、私のマカレナ調査地に同所的に生息しているという事実は、このように個々の種がそれぞれに経験した固有の環境史の上に成立しているのであり、それらの間には何らの必然的な進化史的背景があったわけではない。自然はそのように時間を刻みながら、気まぐれに種を関係づけていくものなのだ。とは言うものの、いかなる偶然であっても、同所的に生活するという状況下に置かれた種とその個体あるいは個体の集合として個体群（具体的には群れのようなものを想定すれば良い）にとっては、近縁でない他種と生活域を分かち合う必要が生じてくる。そこでは歴史的背景も多少は関係するだろうが、むしろ今の関係、例えば何を食物として確保するかとか、すみかとしての空間が必要かどうかとか、巣穴が必要なヨザルのようなサルであれば、どのようにそれを満足させるような適切な大木を遊動域あるいは排他的なわばりの中に確保するか、などの生活上の諸問題が発生することの方が重要である。そこで初めて生活における多彩な適応を前提とした種の多様性、そしてその結果として生じるであろう形態上の特殊性を前提とした種の多様性が、結果的に見れば短期間で生じるのであろう。急速な種の進化はそのようなことでも現実のものとなる。

生物多様性は似た者同士の種において明確化し、意識される。つまり系統発生的根拠に依存しているかに見える。もちろん系統発生的類似性は時系列的に分化の方向へと拡散していく。それゆえに、逆説的な言い方をすれば、最終的にはもはや同所的にさえ存在可能となるかもしれない。種が重層的に生活可能となるのはそういうときであり、実際に私たちが見る自然の複雑さはそのような時間と空間が織りなす曼荼羅なのである。それは生物社会における、いわば自然科学が承認する「多様性」の理解だ。

文化の多元性と多様性をめぐって

現代人*Homo sapiens*の起源をめぐっては、20万年前にアフリカ南部で成立した祖先から、今や地球規模に拡大した生活域を有する21世紀時代人（私たち自身）に至る進化史としてほぼ確定しているように見える（Mann, 2005）。もちろんそれ以前から生存していた他の*Homo*属たちとの混血や、*Homo sapiens*と同時代に生きていたと考えられる他の*Homo*属（たとえば*Homo floresiensis*など）の存在から考慮・検証する必要がある未解決の諸問題が現代人の歴史と文化の多様性を考える際には残されている。とはいえ、現在地球上でみることのできる文化の多様性は、現代人の移動と拡散、それに随伴した融合や敵対的孤立などの諸事象によって形成されたもので

あることは明らかである。現代人が一つの生物種として存在しているということは、すべての人間によって共有されなければならない。もちろん、だからといって人間が区別されないということではなく、差異の歴史は厳然と存在している。ただ、差異化ということと優劣感情を伴う差別化はまったく次元を異にするものであるし、差異を指標にした人間のランク付けなどはけっして許されることでないことは論を俟たない。ここで問題にする現代人の差異とは、生活上の問題として個々の人間集団（あるいは個人）が自ら選び取ってきた生活手段や資源、もしくは生活の背景を形成してきた生業、社会集団の構造、思想信条、不文律、宗教、道德律などを指している。さらには自然との対応関係などもその一部となり得る。

多文化共生社会という言葉が一般社会の中でも定着しつつある現在において、人間の交流の範囲はすでにグローバル化し、理由の如何を問わず、人々は移動し、定着し、交流する。もちろん交流には対立的抗争関係も含まれているから、多文化の交流がそのまま友好的であるわけではなく、また多文化共生社会を標榜しただけで人々が幸福になるわけでもない。それでも交流は差異の現実領域を越境して人と人を結びつけるのである。このような現象がどうして生起するのかという点について、アレックス・メスーディという文化進化研究者が面白いことを言っている。彼は生物学者であり、人類学に関心を持ち、さらに心理学の博士号を持った異色の存在であるが、彼の名著『文化進化論』(Mesoudi, 2011)で「生物の進化と同じく、文化もダーウィンの的に進化する」と述べているのである。これまでも、人類学者たちの多くが、文化は人類集団が環境との相互作用の中で形成してきたということを認めてきたが、文化進化の法則性については「集団内の学習」や「異文化間の相互関与と文化複合」として理解してきた。つまり文化変容と総称された文化の変遷に関する現象には、自然科学的な法則性を考慮することが控えられてきたのだといってもよいだろう。そういう視点でいうならば、文化はひとつの起源的な原初形態から徐々に発展してきたのだが、そこに人間の地理的拡散が関与したために、環境との関係や環境に人間が適応していくプロセスで人間自身の変化を経験したことなどが引き金となって、文化に微妙な差異を形成してきたのだと言えるのだろう。そのような微妙な差異は、時間の経過とともに、また人間集団の分化の速度や拡散の大きさなど、つまり隔離の影響によって、独自の文化事象へと移行してきたのだということを認めるのだ。この見方では、いかなる文化間であっても何らかの事象の連関性をうかがわせるものであって、すべての文化事象は兄弟姉妹的な存在だということになる。このように現代人の進化が一様な祖先から始まる拡散様式として記述できるのであれば、文化もまた同様の拡散方程式に乗った現象であるといってもよいのだ、とメスーディは主張する。

しかし、議論はこれで解決できたわけではない。現実の世界を見渡してみれば、起源を共有したとは到底考えられないような文化事象がたくさん存在することに気づかされる。上記の一元的な文化変容過程に立脚すれば、現実の系統関係を推定できないような文化の差異性は、すでにそれぞれの関係性を示すような文化の断片が失われた（文化には化石がない）結果であって、いわば人類史のミッシング・リンクのようなものであるともいえるかもしれない。とはいえ、違いを繋ぐものが特定され得ない場合には、そこには本来的に異なった文化的動機あるいは原因があったという想定も、また成り立ち得るだろう。そういう意味において、メスーディが論じるように

ダーウィンの進化で説明可能かどうかはともかくとしても、文化起源の多元性という考え方は大変興味深いものなのである。

文化事象の起源問題と現実の共生問題

文化事象を考察するに際しては、文化測定「ものさし」が必要となる。実際には「ものさし」は2種類準備されねばならない。一つは文化進化の時間を測る「ものさし」で、もう一つは文化間距離を測定する「ものさし」である。文化一般という概念はあまりに抽象的過ぎて議論の対象としては十分ではない。ここではもっと具体的に、一つの場合（エリア、多相な共同体）を想定して、問題を整理してみたい。

先に自然における生物多様性を考察する際に俎上に上げたマカレナは、文化論争の場としても適切なモデルである。マカレナはコロンビアのほぼ中心に位置し、コロンブス直後の16世紀から西洋文明化されてきたアンデス高地からは隔絶され、また熱帯雨林のインディヘナが生活してきた領域の西北端に位置していたから、比較的近年までその存在、すなわちインディヘナ固有の文化による痕跡が確認されている。今はすでに同地からインディヘナは絶滅してしまったが、おそらく100年前まで、ひょっとすると50年前まではインディヘナ勢力の一つの中心であったのではないかと、私は推測している。その有力な証拠が二つある。一つはマカレナのジャングル内に石器製作現場があり、その切削残渣がいまも表土の上に残されているということである。アマゾン熱帯雨林内には石器製作に適した石材を産出する場所はきわめて少ない。また、現存するインディヘナ集団で、石器を主な道具として重視している集団を私は知らない。という点から見ても、少なくとも今も石器屑が地面に露出しているような場所は他では見たこともないので、この集団（地元ではティニグア族と呼称されている）は特異な文化能力を有していたのではないかと推測されるのである。マカレナ流域におけるインディヘナの生活の影響を考えるもう一つの根拠は、私たちの調査地周辺ではカカオやミルペソヤシなど食用果実のなる樹木が高密度に分布しているということである。これは他の低地熱帯雨林における植生調査データと比較しても特異的である（木村、2005）。このことから、ティニグア族の人々は食糧確保のためにそれらの樹木を特別視してきたのではないかということが推察される。これらの事象は、すでにティニグア族が消滅した今となっては、どこまでも推理の域を出ないのではあるが、それだけに、何らかの方法である場所に一つの文化が持続し、そして変容し、独自の発展を遂げたかのように見えることの全体を、連続した文化進化として捉えておく必要があるように思えるのである。

もう一つ、考えておかねばならないことがある。それはマカレナに現在生活する人々は、過去70年程度の間そこに定住し、地域を創成した人々であって、いわばティニグア族が消滅するのと入れ替わりに熱帯雨林の主人公になった集団なのである。

入植者の彼らは熱帯雨林を破壊することで生活の場を確保して、少しずつ奥地を目指し、拠点化すればそこが都市となる。私たちの調査地にとって物資や食料調達などのベースとなる村（マカレナは広域にマカレナ市と呼称されるが現実には中心部の村と周辺流域に点在する半孤立農民



図3 マカレナ村（2010）。整然と区画された街路はすでに1970年代は出来ていた。

からなる共同体である。中心部分には市役所なるものもあるが、住民はpuebloと呼ぶ。それは村という意味だ）は、おそらく1950年代から入植がはじまったが、1976年に私が初めて訪問した時点で、すでに街区の骨格として道路がむき出しの地面のままに碁盤の目状に区画されていた。それからの40年で、街区のあちこちに家が建ち、バラックがそれなりに立派な住宅に変化して、見かけはヨーロッパの街のようになった。

さて、問題はその村と周辺（とはいえ、この村から船外エンジン付きのカヌーで早くても2日以上かかるところまで入植者の農場は点在している）に居住する人々の生活文化である。ジャングル生活の知識はすでにインディヘナの消滅とともに失われ、わずかに伝承された知識とこの地に移り住んで以降に得た自然に関する知識、および入植までに有していた農業知識や社会集団事情などで、彼らは生活していかねばならない。したがって、そこには自然との共生などという観念は生活実感としては存在せず、自然は目の前の資源として消費されるにまかされるのであった。そのような行動性向は自然資源の減少を促進し、それは彼ら自身が食料の確保に苦勞するという悪循環のスタートとならざるを得なかったのである。

私たちはコロンビア政府の自然資源庁（現在は環境省国立自然公園局）と協力しつつ、コロンビアの著名な社会学者であったアルフレッド・モラノ博士（Asociación de la Macarena）、共同研究者であった生態学者のカルロス・アウトゥーロ・メヒア教授（La Universidad de los Andes）と連携して、地域住民に対する生活文化および熱帯雨林保全意識の啓発活動を実施し、一応の成果を上げた。モラノ博士は社会学者としてマカレナ自然保護地に入植した開拓民に関する調査研究を報告し（Molano et al., 1988）、住民のあり方に警鐘を鳴らしている。もっともマカレナ地域は反政府組織コロンビア革命軍FARCの拠点の一つであったために、持続的な教育・支援活動が困

難であり、2002年に至って、コロンビアに対ゲリラ強行派のウリベ大統領政権が成立すると、私たちの活動は遂行不能となった。この間の多文化主義に基づく支援活動の一部については既に報告(木村, 2011, 2012)している。

2016年9月にコロンビア政府とFARCの間で休戦協定、引き続き和平合意が成立し、再度、地域文化の創成への試みが始まろうとしている。残念ながら、その後に実施された国民投票では、長期にわたって反政府活動で多くの国民を死に追いやったFARCの責任が追及されないことに対する不満から、合意反対がわずかに上回って国民の承認は得ることができなかった。20万人以上の死者と多くの行方不明者、また強制的に兵士にされた未成年者、さらには国内難民が650万人にも及ぶと想定されている現状においては、休戦し、武器を捨てたからといってFARCが免罪されてよいわけではないだろう。しかし、およそ20年にわたって中断を余儀なくされていた地域文化と安定した住民生活のためのプログラムが進行することはコロンビアの国民文化の全体的な復興のために必要であることは当然であり、コロンビア政府だけではなく、国際的な支援が強く要請されている。

南米諸国は、いわば人為的な建国努力によって文化統合を果たしたという点で、他のすべての地域と文化的様相を異にしている。その点に十分な留意を払いつつ、その基底を形成した諸文化を尊重し、多文化主義の一つのモデルを示すべき責任を負っている。また、それぞれの国と市民は、それに応えるだけの文化的力量を有しているのである。文化を成熟させ、血縁による縦の継承と地縁的あるいは同世代的な横の連携を生物進化モデルにおける種の発展様式のように前進させることは、決して不可能なことではない。そこでもっとも留意すべきことは、あらゆる時点とあらゆる場面において、多文化主義を保障し得る前提としての文化の多様性を守り続けること



図4 熱帯雨林を伐開して形成された牧場



図5 左からモラノ博士，メヒア教授，木村
(1991年マカレナ村郊外Raudarで開催された地域住民の対話集会で)

に尽きるのであろう。

地域理解と文化の多様性について

コロンビア・マカレナにおける入植民の生活問題は、単に貧困あるいは農民問題として捉えるだけでは不十分である。そこには、ラテンアメリカ世界がコロンブス以来ずっと持ち続けてきた人種・民族・征服・差別・略取など、ありとあらゆる人間の暴力と固有の文化への冒涇の歴史が充満している。そのような中で、心あるコロンビアの人たちは、地域における文化と安定した生活の問題として、現状を認識しつつある。コロンビアでは長く内戦、暴力、政治的無秩序が繰り返されてきた。シモン・ボリバル以降だからすでに200年もそのような状況が続いてきたのだ。それでもインディヘナたちが培ってきた固有の文化は、衰退したとはいえ、今も息づき、征服者として入植してきたヨーロッパ人の末裔たちも彼ら本来の文化要素をたくさん地元化してきた。不幸にもアフリカなどから連行されてきた黒人労働者あるいは奴隷たちの中からも、コロンビアを祖国として新しい文化創造に励む人々がたくさん登場する。そのような人々の生き方が、文化の多様性をより大きくし、さらに独自の進化を遂げていこう。メスーディ（2011）が自然科学的生物進化あるいはダーウィンの進化になぞらえて文化進化と呼ぶプロセス通りに、コロンビア文化の多様性が進んでいくのかどうかはわからない。それでも文化進化は確かな手ごたえを彼らに与え始めている。そこに私は個別文化を越境した新たな共生のあり方を見るのだ。

文 献

- Elton, 1958. 川那部浩哉訳『侵略の生態学』1988, 新思索社.
- 川那部浩哉, 1996.『曖昧の生態学』農山漁村文化協会.
- Kimura, K., 1992. Demographic approach to the social group of wild red howler monkeys (*Alouatta seniculus*). *Field Studies of New World Monkeys, La Macarea, Colombia*, 7: 29-34.
- 木村光伸, 2005.「マカレナの森と7種のサル—熱帯林における霊長類の同所性・歴史性・多様性をめぐって—」『名古屋学院大学論集 (人文・自然科学篇)』41(2): 1-20.
- 木村光伸, 2011.「コロンビア・マカレナ調査地とアマゾン熱帯林研究—長期にわたる定点調査の意味と限界, そして将来—」『名古屋学院大学論集 (人文・自然科学篇)』48(2): 107-118.
- 木村光伸, 2012.「フィールドワークにおける国際研究支援活動と危機管理のあり方—コロンビアのVIOLENCIAを乗り越えて—」『名古屋学院大学研究年報』25: 41-52.
- 木村光伸, 2013.「人間らしさの生態的基礎」『総合人間学』7 (電子版) : 84-92.
- 木村光伸, 2016.「共生社会理念の自然科学的枠組み」『共生社会I—共生社会とは何か—』農林統計出版.
- Kimura, K., A. Nishimura, K. Izawa and C. A. Mejia, 1994. Annual change of rainfall and temperature in the tropical forest at La Macarena Field Station. *Field Studies of New World Monkeys, La Macarena, Colombia*, 9: 1-3.
- Mann, C. C., 2005. *New Revolutions of the Americas before Columbus*. 布施由紀子訳, 『1491: 先コロンビア期アメリカ大陸をめぐる新発見』日本放送出版協会, 2007.
- Mesoudi, A., 2011. *Cultural Evolution*. The University of Chicago Press.
- Molano, A. et al., 1988. *Yo Le Digo Una de Las Cosas ...*, Corporacion Araracuara, Colombia.
- Myer, E., 1996. 八杉貞雄・松田学訳『これが生物学だ: マイアから21世紀の生物学者へ』1999, Springer.
- Wilson, E. O., 1975. *Sociobiology*. Harvard Univ. Press.
- Wilson, E. O., 1992. 大貫昌子・牧野俊一訳『生命の多様性』2004 岩波現代文庫.
- Yumoto, T., K. Kimura and A. Nishimura, 1999. Estimation of retention times and distances of seed dispersal by two monkey species, *Alouatta seniculus* and *Lagothrix lagothricha*, in a Colombian forest. *Ecological Research*, 14: 179-191.